別府女子専門学校への太平学園女子専門部の「合併」

今　井　　航[*1]　　吉　岡　義　信[*2]

【要　　旨】

昭和23年９月、別府女子専門学校に太平学園女子専門部が「合併」した。同学園は別府女子専門学校日田分校となり、同学園１期生は昭和24年３月に日田分校を卒業した。同２期生は翌年３月に別府女専を卒業した。卒業生は比較的、同学園国文科経由の者が多かった。一方で同学園経由の教員は「国文」担当者が目立った。別府女子大学「設置申請書」では彼らが名を連ねた。同大学への昇格に果たした「合併」の役割を見落とせない。

【キーワード】

別府女子専門学校　太平学園女子専門部　各種学校　高木市之助　別府女子大学

はじめに

1950（昭和25）年４月、別府大学の前身である別府女子大学が船出した。別府女子大学は、旧制の専門学校令による別府女子専門学校が、大学への昇格を果たしたものである。

創設者の佐藤義詮（1906～1987年、以下では創設者佐藤と略す）は、『別府大学の三十年』（以下では『三十年』と略す）の冒頭に「三十年の回顧」を寄せている(1)。

（前略）

専門学校の認可がおりて暫くして日田にあった大平女学院を吸収合併の話が出て（そのまま―引用者注）、日田の校舎の買収、教師学生の受入れをした。このことは新制大学令が出て女専も大学の認可のためには非常に重要であった。

専門学校のスタッフといえば、大友・首藤・辛島・高山諸先生と大分大学から兼任でこられていた松本・佐瀬順夫両先生などであったが、こういう人達に加えて日田で先生をしておられた高木市之助氏や今福岡大学におられる津田剛さんなど教師陣容をならべて申請書類をつくった。大学設置の主要条件である人的な骨格はこれで出来上る。（後略）

本研究は、ここで別府女子「大学の認可のためには非常に重要であった」とされる「日田の校舎の買収、教師学生の受入れ」に光を当てて、別府女子専門学校に「合併」した「大平女学院」に注目する。「大平女学院」は、正式には、太平学園女子専門部（以下では太平学園と略す）と言う(2)。

[1]別府大学アーカイブズセンター研究員
[2]別府大学アーカイブズセンター研究員

同じ『三十年』では「資料的に、この時代の具体像を物語るものは皆無に近い」と指摘されていた[3]。ところが、2021（令和３）年に発行された『別府大学開学ものがたり』（以下では『ものがたり』と略す）では、冒頭の引用に見られる高木市之助による思い出文を紹介している[4]。

> 私は戦争とは無関係に、かねて停年後は日田で勉強しようと思い、広瀬宗家の嫡流の広瀬正雄さんが当時日田の市長をしていましたから、原さん（注　原志免太郎、灸の大家）を市長に紹介し、財政基礎はこの原さんと市長に対する信用による寄付が予想され、学校と研究所の構想は京城（ソウル）から引き揚げて来た若手に任せ、最後に文部省の認可をうけることについては、私が当時文部大臣をしていた京城の元同僚の安倍能成に会いに行ってその助力で、まあまあ順調に運んだのですが、夢はやっぱり夢だったのか、私が文部省から日田に帰ってきた直後例の財産の封鎖というたいへんなことが突発して、今まで寄付を引き受けていた筑豊の炭鉱や大牟田の大地主などの財産が一瞬に封鎖されて一文無しになってしまったのです。

この高木の思い出文からは、太平学園の設立へは日田市長の広瀬正雄や灸の大家である原志免太郎などの関わりがあったこと、さらには、その苦難の道のりが窺える。

『ものがたり』では続けて、やはり冒頭の引用に見られる津田剛を「日田の太平女学園（そのまま-引用者注）と別府女専との合併で」「中心的役割を果たし」た人物と見、その合併の秘話まで紹介している[5]。いったい、太平学園は、どのような学校であったのだろうか。

その沿革を、松本裕司が明らかにしている[6]。松本によれば太平学園は、敗戦直後の1946（昭和21）年６月に大分県日田市に創立された。旧制専門学校程度の女子高等教育機関で国文科と英文科の２学科を擁した。戦後の高等教育制度改革と財政難等が要因で、1948（昭和23）年９月には「「別府女子専門学校」と合併し日田分校となり、翌年３月にはその歴史を閉じた」とされる。『大分県教育百年史』『大分県の教育史』『大分県歴史事典』などには、その名がとどめられていない。しかし松本は、太平「学園関係者の断片的記述」を猟歩し、『日田市十年史』や『広報ひた』などに見られる太平学園に関する記録も頼りに、その「第一次資料に基づきながら、設立から合併に至る過程を検証」している[7]。

その設立の発端は、文学者として著名で「咸宜園のあった「学都」日田市に「オクスフォードのようなユニヴァーシティ」を創設する構想を抱いていた高木市之助に「仏教家であり、日本国体学の創始者・田中智学氏の弟子」であった「医者の原志免太郎氏が具体的な学校設立の「相談」を持ちこんだこと」にあったという。「教育には門外漢の原氏のみでは実現できなかった」ようで、その設立計画には発願者である原の「熱意と趣旨に共鳴し」た前京城帝国大学予科講師・津田剛の協力があって具体化したとされる[8]。ここには、咸宜園の塾主・広瀬淡窓の子孫でもある日田市長の広瀬正雄も関わった。先の『ものがたり』からも窺える点である。

開設に必要となる校舎や校具が確保され、学則も整い、その開校２か月前となる1946（昭和21）年４月10日に「太平学園女子専門部設立認可申請書」が大分県に提出された。そこでは「敗戦の自覚にたった新時代を担う女性育成の目的が示されるとともに、将来の専門学校昇格を予定しながらも、設立認可の関係から各種学校として申請され」ていた[9]。翌月５月19日には入学試験が実施され、国文科41名、英文科36名が合格している[10]。入学式は、その翌月６月１日に淡窓図書館講堂で行われ、３日から授業が始まった。教授陣は「九州帝国大学教官が多かったことが特色で」あったとされ、福岡県から通勤していた教師もいた。

その「財政的基盤はきわめて不安定で」校舎の移転も開校の翌年1947（昭和22）年になってか

らであった。新校舎とは言え「ガラスすら十分に入っていない有様」だったようである。それでも松本は、その卒業生へのアンケート結果から、当時の授業の様子を素描することに成功しており、教官も学生も相応の意気込みで授業に臨んでいたとしている。さらには、学園祭の取り組み、あるいは耶馬渓への遠足や修学旅行の様子など課外活動へも肉薄し、「学園生活は充実し、青春が謳歌した」としている。またさらに、公民大学講座が開講されていた。「週に一回～二回夜間の講義」が行われており、太平「学園の教授たちが、積極的に地域に入り、教育文化の牽引者となった」と見られている。

ところが、戦後の教育改革が、学園の存立を揺るがすこととなった。1947（昭和22）年３月の教育基本法、学校教育法の成立に伴う学制改革は、いわゆる６・３制の単線型学校体系の最上階梯に４年制の大学を位置づけることで、修業年限３年の専門学校を廃止するものであった。各種学校として始まった太平学園は「将来の専門学校昇格を予定」していたものの「女子大昇格は事実上不可能であった」[11]。松本は、その開設３年目の1948（昭和23）年４月からは「新入生は募集停止となり、私的事情や学園の将来を見越して多くの退学者が出ていた」と考えている。それでは、退学をすることなく1949（昭和24）年の３月に卒業をひかえていた１期生や翌年に卒業が予定されていた２期生は、どうなったのだろうか。

1949（昭和24）年３月６日、「太平学園第１回入学生に対して、別府女子専門学校佐藤義詮名による」「卒業証書が授与され」ている[12]。卒業生には「中学校高等女学校教員免許状」が授与されている。松本は、以下のように述べる[13]。

> 二十四（一九四九）年の第一回生の卒業をひかえ、女専の卒業資格と教員免許状の取得のために最終的に選択された道は、別府女子専門学校との合併であった。合併に際しては、別府女子専門学校に図書が不足したためか、高木所蔵本を一時的に別府女子専門学校所蔵とした。また、教員免許の交付については、生徒は文部省派遣試験官の試験を別府女子専門学校の教室で受けたという。

その合併は、彼女らの「卒業資格と教員免許状の取得」を保証したと言えるだろう。

以上のように松本は、その沿革で太平学園の「設立計画」「開設準備」「開校と学園体制の整備」「学園生活の展開」「終息への道」を明らかにし、大分県の戦後教育史における同学園の意義を考察している。それでは、合併先となった別府女子専門学校からすれば、その合併は、何を意味するのだろうか。

冒頭で見たように創設者佐藤は「このことは新制大学令が出て女専も大学の認可のためには非常に重要であった」と書き残している。本稿は、松本の明かした太平学園の沿革を参考にしながら、松本が目を向けることのなかった、言わば別府大学史における太平学園の意義を、その「合併」に着目して考察しようとするものである[14]。

手始めに、松本が参考にしていた諸資料に加えて『季刊別府大学』『三十年』『学校法人佐藤学園の八十年』など別府大学関係資料に見られる「合併」に関する記述を取り上げる。次に、別府女子「大学の認可のためには非常に重要であった」とされる「教師学生の受入れ」の各実態を明らかにする。共著者の吉岡義信が近年、手に入れた1946（昭和21）年11月21日付の「職員組織表」や『太平學園女子専門部概要』に見られる「教職員名簿」、あるいは『校友會名簿　昭和二十四年三月調　別府女子専門學校日田分校』、さらには『別府大学同窓会々員名簿』などを照らし合わせながら、そこに『大分合同新聞』や『別府女専新聞』に見られる関係記事へも目をやることで、その各実態へと迫る[15]。こうして「合併」の実態を解き明かすことで、あらためて太平学

園が別府女子専門学校に合併したことの持つ意味を捉えてみたい。ようやく最後に、別府大学史における、その太平学園の意義を考える。

一　その「合併」に関する記述

まずは、「合併」のことで残されている関係の諸記述を見てみよう[16]。松本は、『昭和二十一年度総務（庶務会計）関係書類』所収の「通知案」（昭和23年11月10日付）を引用している[17]。

> 拝啓　時下秋冷の候益々御清栄の段御喜び申し上げます。
> 陳者設立者側に於て日田市北友田町二丁目所在太平学園女子専門部と別府女子専門学校と合併することに協議纏り去る九月一日より手続を済し太平学園女子専門部在校生徒は全部別府女子専門学校に転入学許可され今日附を以て太平学園内に日田分校を設置することに致しましたから今後共倍旧の御援助御指導を御願い致します
> 　先は乍延引御通知旁々御願い申上げます　　敬具

1948（昭和23）年９月１日から太平学園は、別府女子専門学校日田分校（以下では日田分校と略す）となり同学園の「在校生徒は全部」転入学が許可されたことがわかる。ここには「合併」とあるが、別府女子専門学校に籍を置いていた松本義一は後に、それを「統合」と言った[18]。

> 松本　それからね終戦後高木市之助先生ね。それが日田の方で女専……
> 古庄　大、なんとか学園というのでしょう。
> 松本　ええ、それを卒業期になりましてね、資格を得なくちゃならない、それで別府の方に統合したわけですね。そうして第一回卒業生の時こちらの連中と日田の連中と一緒になりまして、文部省の役人が来て直接試験するのに、学科試験は私は平素手きびしく教え込みましたが、その受験の成果によってええ……

また、創設者佐藤は冒頭の引用文に見られるように「吸収合併」と表している[19]。それで言えば先の松本と同じく、別府女子専門学校に籍を置いていた大友芳雄も「吸収」と言った[20]。

> 日田市に太平学院という女子の学校があり、院長は故高木市之助先生であるが、実際は現福岡大学のＴ教授が万事を取りしきっていた。しかしこの学校は学生数がきわめて少なくて経営が困難となっており、さらに文部省認定の正式の女子専門学校でないために卒業しても教員免許状は受けられない。そこでこれを別府女専が吸収することになり、私はわざわざ日田市に出かけてその学校を見たが、平屋のまことに貧弱な小さいものであった。こうして在学生全部を先生とともに別府女専に吸収したのである。

その大友は「草創の頃」を語り合った座談会では「併合」とも言い表している[21]。

> 大友『ドイツ語と哲学、日田の大平学園の学生を引き受けて併合し、高木市之助先生や、津田先生など来られました』

このように、その「合併」は「統合」「吸収」「併合」等とも言われ、さらに「合体」と言う場

合もあった[22]。

〝高い知識と教養を求め、理想に燃えた女性を育てる〟という学園の方針を貫くため「女子大昇格をめざす別府女専との合体も、やむをえない」との決定は、むしろ当然の帰結であったのかも知れない。二十三年四月、太平女専は、開学以来わずか二年で、別府女専（佐藤学園）と合体した。

こうして様々な表現で残されていることからは、その「合併」が松本の明かした太平学園の沿革からわかるような「卒業資格と教員免許状の取得のため」という同学園側の思惑とは別に、別府女子専門学校側の思惑もあって成立したものであったと見えてくる。

二　「教師学生の受入れ」の実態

次に、その実態へと接近してみよう。創設者佐藤は「日田の校舎の買収、教師学生の受入れ」を別府女子「大学の認可のためには非常に重要であった」と振り返っている。ここでは、そのうち「教師学生の受入れ」の各実態へと迫ってみたい[23]。

1　教員の異動

太平学園の開校２か月前となる1946（昭和21）年４月26日付の『大分合同新聞』に、次のような記事が掲載された[24]。

日田市の女子專門學校誘致は預金封鎖、財産税等で一時お預けとなりその代り六月から太平學園女子專門部を開設する。校舎は北友田三丁目春日造兵廠本部跡、修業三ケ年、學園長に醫博原志免太郎氏、校長に元九州大学教授髙木市之助氏、教授に元京城大教授津田剛、長崎經專教授德永新太郎、元朝鮮史料編纂室田川孝三、九大助教授中山竹二郎、元京城大教授須藤松雄氏等を迎へる
國文、英文两科生四十名づゝを目下募集中

この記事で少なくとも原や高木をはじめ、７名の教員が太平学園に迎えられる予定であったことがわかる。

表１は、太平学園に在籍したと見られる教員らを一覧にしたものである。この一覧からは、その７名のうち徳永だけは同学園の開校以降、不在であったと見られるが、その徳永を除いても計31名の教員が同学園に在籍したことがわかる。また、同表では、できる限りで各教員の担当科目も示しておいた[25]。一見して、国文と英語の多さに気づかされる。それでは「合併」後、教員らは、どうなったのだろうか。

『校友會名簿　昭和二十四年三月調　別府女子專門學校日田分校』で調べたところ、その31名中12名が「合併」後の日田分校に籍を置いていたと判断できた。表中「日田分校在籍」の列で、○印を付けた12名である。その他■印を付けている11名は、同名簿において「旧講師」に括られて明記されており、このため日田分校に在籍したかどうかが判然としない教員らである。

続けて、日田分校に在籍したと判断した○印の12名に着目し、同時に『三十年』へと目を向ける。『三十年』では、別府女子専門学校の「教官メンバー」や別府女子大学の「設置申請書」に載った「教官人員構成」などを確かめることができる[26]。その12名と照合すると創設者佐藤は

表１　太平学園女子専門部の教員一覧

氏名	担当科目	別府女子専門学校 日田分校在籍	別府女子専門学校 在籍
秋月　致	不明	■	—
麻生　龍生	家政	■	—
石橋　克己	英語	○	—
磯部　巌	英語・哲学	○	—
尾嶋　信好	国文	○	▲
河上　和一	英語	○	—
君村　虎鹿	農業	■	—
空閑　重行	不明	■	—
栗木　光代	不明	■	—
小林栄三郎	西洋史／歴史	○	—
佐藤　義詮	不明	○	○
佐野　前光	不明	■	—
調　圓理	不明	■	—
須藤　松雄	国文	○	○
高木　市之助	国文	○	○
田川　孝三	漢文	—	—
津田　剛	哲学及び倫理	○	○
豊田　実	英文学	—	—
永江　一郎	音楽／東洋音楽	—	—
長岡　清一郎	理科／数学	—	—
中山　竹二郎	英文学／英語	—	—
縄田　正造	不明	■	—
原　志免太郎	理科	○	—
原　実	家政	—	—
平塚　益徳	教育	—	—
広瀬　厚	体錬	■	—
福田　良輔	言語学／国文	○	▲
美野　千鶴	国文	—	—
村上　清司	不明	■	—
目加田　誠	漢文	○	—
山永　百合子	英語	■	—

注：以下を参照して作成した。
・昭和21年11月21日付學校調査回答「職員組織表（11.20現在）」
・「教職員名簿」『太平學園女子専門部概要』所収
・「國文科に嬉しい便り　新講師數名を迎ふ」、『別府女專新聞』第10号、昭和23年９月25日
・『校友會名簿　昭和二十四年三月調　別府女子専門學校日田分校』
・別府女子専門学校の「教官メンバー」、『別府大学の三十年』、16～17頁
・別府女子大学の「設置申請書」、『別府大学の三十年』、44～45頁
・松本裕司「三、戦後教育発足期における「太平学園女子専門部」の沿革」、『教員養成史の二重構造的特質に関する実証的研究−戦前日本における地方実践例の解明−』、144～146頁

言うまでもなく、その他５名が浮き彫りとなった。尾嶋信好、須藤松雄、高木市之助、津田剛、福田良輔の５名である。彼らは、1949（昭和24）年３月に「太平学園第１回入学生」が卒業したことで、その役目を終えたと考えられる日田分校から、別府女子専門学校に異動したと見られる。

とりわけ須藤、高木、津田の３名は、太平学園が日田分校となった1948（昭和23）年９月の『別府女専新聞』に掲載された下の記事に見られるように、その「合併」と同時に別府女子専門学校に招聘されて日田分校だけではなく、すでに別府女子専門学校においても授業を担当していたようである[27]。

> 新学期を迎えるに当り、太平文化研究所より（そのまま―引用者注）、数名の講師を招聘し、授業内容を充実させる旨、教務課では、内報している。
>
> その講師は、現代哲学の権威、津田剛先生で、本校では哲学概論教育学を担当することになっている。又、國文学者、高木市之助先生は、文学一般、須藤松雄先生も國文学を担当されることになっており、前期、経済科が、新講師を数名一度に迎へ、他の科の羨望の的となったが、後期は、國文科に集中し、生徒を喜ばしている様である。

なかでも高木のことでは、創設者佐藤が「国文学の高木市之助先生に来ていただいたこと」が「新制大学令による大学設置に重要な役割りを果たし」たとし、この点を「まず第一に」挙げている[28]。また、別府女子専門学校に籍を置いていた首藤基の記憶によれば、高木は「別府女子大学への来学要請にこたえて、日田の学生を別府女子専門に移籍する事を条件に、来学を承諾された」とされる[29]。やはり彼女らの「卒業資格」の取得如何が心配されていたことが窺える。他方、同じ首藤は別のところで「それからね、これは、どの先生も知っているけれどね、高木市之助さんを呼ぶ時にもね、市之助さんに条件を出されてね仕方なく他の先生を一人かかえこんだんです（そのまま―引用者注）」と言い残している[30]。この条件は、先の「日田の学生を別府女子専門に移籍する」というのとは異なる。ここで「かかえこんだ」と言われる、その「一人」とは、いったい誰なのだろうか。

高木から創設者佐藤への手紙が残されている。その「合併」翌年のものであることに注意が要る[31]。

> （前略）過日須藤君が上京の上、来訪、今般御尊父が逝去されて以来家庭の事情でどうしてもこっちへ轉住の余儀なき旨を申され、横須賀市の清泉と申す女専へ轉任したき旨切に申されましたので、私としても同君の家庭上の御事情とあっては御引留めも致しかね、早速、帰って貴台に右の諒解を得られる外は無からうと申して置きましたところ（そのまま―引用者注）、本日、速達でその通りにされ、貴君の御諒解を得た旨申し越されました。須藤君が御校に於て不可欠の地位にある事も承知して居りますが、右様の次第（そのまま―引用者注）、私としても御留めする理由を●発見し得ず、誠に已むを得ない事と存じます。就きまして誰か後任でもと私なりに物色して居りますが、こっちへまゐってしまひましたので急に心當たりもなくこっちにゐる人丶は中丶別府まで行かうと言ふ有資格者もなく困却して居ります。どなたか心當りはあ●りますでせうか。尚、須藤君の考へとしては尾島君を起用して無理にでも別府へ専任になって貰ってはと申して●居られまして、尾島君ならば日田から合流した●生徒にとっては此の上もない適任者であり（そのまま―引用者注）、学力、人格等申分ありませんが、御家庭の事情でどうなる事●引受けてくれるかどうか、それと資格は

●須藤君のやうにはまゐりますまいが、今頻りに勉強して論文等を書いて居りますので、近い将来に教授適格者となる事は大丈夫です。それに学歴としても東大の国文科出身、九大の大学院に入って二年？以上も勉強して居たのですから、業績として発表したものはなくても、有ても助教授なら大丈夫と思ひます（そのまま―引用者注）。もしそちらに適當な候補者がなかったら、私からも勧めてみてもよいと思ひます。

「合併」後１年足らずで、「須藤君」から「家庭の事情でどうしても」「轉住」して他の「女専へ轉任した」いことを伝えられた高木が、創設者佐藤に「後任」の「心當り」如何を尋ねつつも、同時に「須藤君の考へとして」「尾島君」を推していたことまでわかる。

「須藤君」は須藤松雄で、「尾島君」は尾嶋信好である。須藤のことを高木は、次のように書き残している[32]。

須藤松雄君は家庭の関係から京城の中学を出て同じく京城の帝大の法文学部という、今はどこにも存在しない大学の国文学を専攻した、第二回の卒業生である。私はたまたまその時分この大学で国文学の講座を受持っていたので必然に知りあいになり、今では師弟というよりも同学といった間柄になってしまったが、君の素質のよさは当時から誰もが認めたところで、卒業後直ぐ母校の研究室の助手となり、次いで予科の教授となり、やがて終戦と共に大学は崩壊し、君自身も家族を率いて九州に引き上げた上、私が大分県の日田に建てたばかりの、私学女専と研究所とを手伝って下すったが、俸給とは名ばかり、しかも無一物の引揚者と来ているので、一家揃って随分苦労の連続だったが、二十五年以降は清泉女大の国文科主任教授となって今日に及んで居る。

須藤との関係で、高木は「今では師弟というよりも同学といった間柄になってしまった」「大分県の日田に建てたばかりの、私学女専と研究所とを手伝って下すった」等と述べている。二人は当初、師弟関係にあった。その「合併」と同時に、別府女子専門学校に招聘されていた二人でもある。

ならば、先の首藤が「高木市之助さんを呼ぶ時に」「市之助さんに条件を出されて」「かかえこんだ」と言う「一人」は「須藤君」であったと見えてくる。自身の都合で「轉住の余儀なき」とした須藤が、高木に「日田から合流した●生徒にとって」「適任者である」と見た「尾島君」を自身「後任」の候補者に挙げたのは、その「合併」後１年足らずの時であった。先に『三十年』で、別府女子専門学校の「教官メンバー」や別府女子大学の「設置申請書」に載った「教官人員構成」などを確かめたことで、その尾嶋のことも日田分校から別府女子専門学校に異動したと見ようとしたが、この時のことからすれば実は尾嶋は、別府女子専門学校に異動していなかったと見られる。それで同表「別府女子専門学校在籍」の列では異動如何が判然としないため、彼には▲印を付けた。

同列では、やはり福田にも、同じ「教官メンバー」や「設置申請書」などによれば、尾嶋と同じく別府女子専門学校に異動したと見られるものの、やはり須藤、高木、津田のようには判然としないことから▲印を付けている[33]。

あと一人「合併」と同時に日田分校だけではなく、すでに別府女子専門学校においても授業をしていたと見られる津田のことでは、のちに尾嶋が次のように言い残している[34]。

太平学園は、終戦によって京城から引き揚げて来られた津田先生が、創立の発願者原志免

太郎先生の熱意と趣旨に共鳴し、先生の朝鮮での活動と同じ熱意と行動力とオルガナイザーとしての説得力を発揮し、苦難の道にあえぎながら全力を傾注した事業であったと思う。私はその始終を直接間接に知っている。（後略）

同文では、さらに「危機に陥ち入った太平学園の終末の見事な収拾ぶり。そのために生徒達は女子専門学校卒業生として、日田での学園生活をなつかしみながら、それぞれの人生を歩いている」と締めくくっている[35]。

尾嶋の言い残した、津田による「太平学園の終末の見事な収拾ぶり」からは、『ものがたり』においても津田が「日田の太平女学園と別府女専との合併で」「中心的役割を果たし」た人物と捉えられていることが思い出される[36]。

２　学生の転学・卒業

太平学園の寮生を世話したとされる、長善寺の住職であった大神順は、次のように書き残している[37]。

昭和二十三年であったか、学制改革のことが新聞に報ぜられた。（中略）その翌年より学生募集が難しくなった。丁度別府に女専が出来、別府の立地条件もよかったのであろうか、大学への昇格の方針もあったので、別府女専と合併して、一期生は昭和二十四年春卒業した。二期生は別府の方に移籍したようである。（後略）

その「合併」後、太平学園１期生は1949（昭和24）年の春に卒業し、同２期生は別府に移籍したことが窺える。別のところで大神は、次のようにも述べている[38]。

（前略）たまたま私が女専関係者と親しくしてその設立、別府女専との合併のことをある程度知っていたので筆をとるわけである。（中略）

二十三年度の学生募集は出来ず、在学中の学生をどうして無事卒業させることが学校側の大問題となったのである。（中略）津田先生は別府女専にも出講されていて、別府女専との合併を考えられたようである。

二十一年度入学者は日田で卒業させ、二十二年度入学者は別府女専に移籍して無事卒業を果したのである。

1946（昭和21）年度入学者であった１期生は日田分校を卒業し、1947（昭和22）年度入学者であった２期生は別府女子専門学校を卒業した。同時に1948（昭和23）年度の学生募集、言わば３期生の募集はできなかったことまで確認できる。

表２は、太平学園国文科入学生の転学・卒業を示したものである。もう一つ表３は、同英文科入学生の転学・卒業を示している。同国文科１期生は、17名が1949（昭和24）年３月に日田分校を卒業している。また、同英文科１期生は、14名が同じく卒業している。次に、同国文科２期生は、不明で▲印を付けた者を除く12名が1950（昭和25）年３月に別府女子専門学校を卒業している。また、同英文科２期生は、３名が同じく卒業している。合計すれば、同国文科が29名で、同英文科が17名である。

ここで、「合併」２か月後となる1948（昭和23）年11月の『別府女専新聞』へ目をやると「本校において、最小人数であった國文科が最大人数を有する様になり」とある[39]。そこで、『別府

大学同窓会々員名簿』で調べたところ、言わば太平学園経由ではない、別府女子専門学校の国文科卒業生は、同じ２年間で15名であった。同じく英文科卒業生は、49名であった。上で見たように、太平学園経由の卒業生は、国文科が29名、英文科が17名であったから、とくに別府女子専門学校国文科の学生数に占める太平学園国文科の入学者数の割合の高さに目が留まる。その記事で「國文科が最大人数を有する様になり」とあったのにも肯ける。

「合併」に力を尽くしたとされる津田剛は、1990（平成２）年１月に亡くなった。その２年後となる1992（平成４）年10月に『津田先生ご夫妻を偲んで』が発行されている[40]。そこには「日田太平女専の教え子」３名が追想文を寄せている[41]。大隅キクノ、小川和子、加月弘子の３名で、大隅は表２の１期生に名を連ねる光安きく乃で、加月は表３の１期生に見る赤司弘子である[42]。もう一人の小川は、表２の山浦和子か、もしくは表３の２期生に並ぶ河原和子の、どちらかである[43]。

そのうち大隅は[44]、

> 当時大分県には別府に女子専門学校があり、当時の情況としては一県に二つの女子大学は無理であるとの事から、合併して四年制の女子大学として、再出発しようと言うことになり、津田先生を含め教授陣も学生も別府女子大学に合併する事になりました。そこで太平学園としては、別府女子専門学校と合併の形で、一回生、二回生を世に送っただけで消滅した形になりました。

と振り返っている。

また、1996（平成８）年５月に大分県立日田高女第二十八回卒業五十周年記念文集として発行された『宜園の華』には、表２の１期生に名を連ねる梶原清子が「五十年の想い」の中で、太平学園で過ごした様子にもふれ「二十四年三月、西鶴の好色五人女の卒論で無事卒業出来ました」と記している[45]。

表２　太平学園女子専門部国文科入学生の転学・卒業

	氏名	昭和24年３月 別府女子専門学校日田分校 卒業	昭和25年３月 別府女子専門学校 卒業
１期生	岩尾　禮子	○	―
	江頭　幸子	○	―
	梶原　清子	○	―
	齊藤　愛子	○	―
	佐藤　敬子	○	―
	立石　恭子	○	―
	長　和子	○	―
	新關　康子	○	―
	野崎　邦子	○	―
	林　竹子	○	―
	廣畑　數子	○	―
	丸山　克子	○	―
	光安　きく乃	○	―

	氏名	昭和24年３月 別府女子専門学校日田分校 卒業	昭和25年３月 別府女子専門学校 卒業
１期生	山浦　和子	○	―
	山手　美代子	○	―
	山本　典子	○	―
	渡邊　淑子	○	―
２期生	大場　綾子	―	○
	甲木　喜美子	―	○
	隈本　和子	―	○
	長主　惠美子	―	○
	待鳥　富士子	―	○
	松永　貞子	―	○
	宮崎　玲子	―	○
	吉川　信子	―	○
	吉田　本子	―	○
	横尾　妙子	―	▲
	要名本　美惠	―	○
	和田山　雅子	―	○
	足立　貞子	―	○

注：以下を参照して作成した。
・『校友會名簿　昭和二十四年三月調　別府女子専門學校日田分校』
・『別府大学同窓会々員名簿』1958年７月20日発行

表３　太平学園女子専門部英文科入学生の転学・卒業

	氏名	昭和24年３月 別府女子専門学校日田分校 卒業	昭和25年３月 別府女子専門学校 卒業
１期生	赤司　弘子	○	―
	穴井　靜代	○	―
	池田　純子	○	―
	池永　太陽子	○	―
	諫山　安子	○	―
	榎原　時子	○	―
	岡本　カズ子	○	―
	工藤　幸惠	○	―
	熊抱　隆子	○	―
	坂本　信子	○	―
	財津　タミ	○	―
	白川　智子	○	―
	田中　エイ子	○	―
	椋野　愛子	○	―

	氏名	昭和24年３月 別府女子専門学校日田分校 卒業	昭和25年３月 別府女子専門学校 卒業
２期生	河原　和子	―	○
	高木　澤子	―	○
	渡邊　ヤエ子	―	○

注：以下を参照して作成した。
・『校友會名簿　昭和二十四年三月調　別府女子専門學校日田分校』
・『別府大学同窓会々員名簿』1958年７月20日発行

三　「合併」を巡る思惑の交差

このように、太平学園への入学者らは皆ではないが、日田分校に転学し、１期生は日田分校を卒業し、２期生は別府女子専門学校を卒業していた。また、太平学園の教員らのうち少なくとも12名は、日田分校の教員となっていた。太平学園１期生が卒業したことで日田分校は、その役目を終えた。その後、とりわけ須藤、高木、津田の３名は、別府女子専門学校に異動していた。

こうした実態を踏まえながら、別府女子専門学校に太平学園が合併したことの持つ意味を捉えてみたい。松本による太平学園の沿革からは、同学園側の思惑が、彼女らの「卒業資格と教員免許状の取得」を保証することにあったと考えられたが(46)、一方で別府女子専門学校側の思惑は、どこにあったのだろうか。

『別府女専新聞』第13号に「國文科日田に分校を有す　入學試驗による轉入許可」と見え、その記事には(47)、

> 別府女子専門学校、日田分校の問題は、何かあいまいの中にその解決を見た様であったが、かつて後期の初めの校長の談話が眞実を物語るものであると見てよい。（後略）

とあった。ここに「後期の初めの校長の談話」とある。「校長の談話」は、さかのぼること『別府女専新聞』第10号の記事に見られる「別府女子大實現を佐藤校長に聞く」の中身で、つぎの箇所を指すと思われる(48)。

> （前略）
> 問　しかし学校行政としての運営方針は何か？
> 答　構想の一部かも知れぬが、文学に限らず、広く文化としての立場から、一般教養課目には、経済、法律、社会学、自然科学等も含まれる様な講座内容とし、これらの過程は全科合同でなし、いよいよ専門科程を、経済、英文科は、別府女子大で、国文科は日田分校（将来の話だが）でおへる様にしたい（そのまま―引用者注）。（後略）
> 問　最後に別府女子大昇格に際して？
> 答　可能性は強い、今少し、地元民の熱がほしい。私としては、私の自由な構想を学生が同じく夢にもつ様になり、形式的な昇格案と相対して行ければ、最も有利な昇格の因となろうと思っている。

一つ前の引用では、「別府女子専門学校、日田分校の問題」を「何かあいまいの中にその解決を

見た様であった」と記しておきながらも、「別府女子大学昇格」の「可能性は強い」とした創設者佐藤が、ここで「いよいよ専門科程を、経済、英文科は、別府女子大で、国文科は日田分校（将来の話だが）でおへる様にしたい」と答えていたことに、その「眞実」を見ようとしていたのである。

さらに遡ってみると同新聞の第４号では、創設者佐藤が「是非本校を大学にしたいと思ふ」と述べたことが記されている[49]。

別府女子専門学校側の思惑はその「合併」を通じて、いずれ別府女子大学への昇格を果たすことであり、将来は日田分校に国文科を置くことにあったと言えるだろう。

おわりに～別府大学史における太平学園女子専門部「合併」の意義～

太平学園の沿革を明らかにした松本は、大分県の戦後教育史における同学園の意義を考え、つぎの３点でまとめている[50]。第一に、同学園の設置は、県下の女子教育の振興になるとともに、女子の社会参加に資するもので、女子高等教育の機会拡充に寄与した。第二に、それは、学生の地域の文化的行事への参加を促し、また「公民大学講座」の開催に見られるような、教官の啓蒙的活動を引き起こしたことで、地域文化の向上に貢献した。第三に、結局は日田分校や別府女子専門学校を卒業したことになったが、同学園に入学した者の中から新制中学校の教員となった者がいたことから、前期中等教員養成に貢献した。

その第三の点からすれば、別府女子専門学校への「合併」が、彼女らの「教員免許状の取得」を保証したとも言い換えられる。同時に、彼女らの「卒業資格の取得」を保証したのも、また確かであった。太平学園国文科１期生は、17名が日田分校を卒業した。また、同英文科１期生は、14名が同じく卒業した。さらに、同国文科２期生も、12名が別府女子専門学校を卒業し、同英文科２期生は、３名が卒業した。とくに、別府女子専門学校国文科の学生数に占める太平学園国文科入学者数の割合の高さは、注目に値した。この点で、「合併」後に「羨望の的」が「國文科に集中し、生徒を喜ばしている様」と記されたり「國文科が最大人数を有する様になり」と記されたりしていたのには、首肯できた[51]。

同時に、太平学園に在籍していた31名の教員のうち12名は日田分校に籍を置き、そのうち須藤松雄、高木市之助、津田剛の３名は、同学園の１期生が卒業したことで役目を終えた日田分校から、別府女子専門学校に異動していた。その後１年足らずで転任を希望した須藤の後任候補者となったのは、尾嶋信好であった。別府女子大学の「設置申請書」に名を連ねていたのは津田、尾嶋、高木に、福田良輔を加えた４名であった[52]。太平学園では「哲学及び倫理」を担当していた津田を除けば、尾嶋も高木も福田も、それに転任した須藤も皆「国文」担当者であったことは興味深い。創設者佐藤が後に「大学設置の主要条件である人的な骨格はこれで出来上る」とした申請書類に、そうした太平学園経由の教員らが含まれていたのである[53]。さらに言えば松本が述べていたように、高木の所蔵本が「一時的に別府女子専門学校所蔵と」されていたことにも目を向ける必要があるだろう[54]。

別府女子大学への昇格を目指した動きは、別府女子専門学校から大学設置委員会へ同大学の設置申請が行われたことに見ることができる[55]。1948（昭和23）年８月のことであったから、その「合併」は、同設置申請の翌月であったと判断できる。その後、設置認可は下りなかったが[56]、翌年1949（昭和24）年度中に大学設置審議委員会の二回にわたる実地調査が行なわれ、1950（昭和25）年度からの別府女子大学の新設認可が下りることとなった[57]。こうした経緯から、その認可に「合併」が果たした役割の大きさを、看取することができる。

高木が創設者佐藤に宛てた手紙では「新制大学申請の際、四年制にするか二年制にするかに就ては随分同處でも問題になってゐるやうですが、昨日●聞いた情報では、既に昇格した私立の女子大がみんな志願者が居なくて経営難に落ちてゐる為に、今度の申請も二年制が圧倒的に多数」とも記されている。さらに高木は「別府も思ひきって二年制にして置いて」と明言し「二年制大学」の申請を、創設者佐藤に勧めていた(58)。それでも彼は、四年制女子大学の設置に拘っていたのである。創設者佐藤の「大学にしたい」という思いが如何ほどのものであったのかが伝わってくる(59)。

太平学園側の思惑と別府女子専門学校の思惑の交差は「合併」後、詰まるところ別府女子大学の誕生へと結実した。文学部の単科大学で当初、英文学と国文学の両専攻があった。とりわけ国文学専攻が設けられたことに、太平学園から異動していた教員らの果たした役割が大きかったと考えられる。加えて、同学園から日田分校や別府女子専門学校へ転学して卒業した国文科学生の多さも、そこに寄与したものと思われる。

引きつづき、別府女子専門学校から別府女子大学への昇格過程を解明していきたい。あわせて、別府女子専門学校の前身である別府女学院から同専門学校への設置過程の解明も、課題である(60)。

他方で津田剛へと目をやれば、別府大学附属高等学校の前身である自由ヶ丘高等学校の誕生までもが視野に入ってくる(61)。また他方で太平学園の、その後へと目を向けるならば、1949（昭和24）年10月26日付で、同学園設立者の原志免太郎から大分県知事に校名変更が申請され、翌月11月21日付により日田文化女子学院に改称することが認可された(62)。太平学園は、各種学校のままで日田文化女子学院となった。

注

（1）三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』（佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日）、１～６頁。
（2）「太平學園女子専門部設置ノ件（日田市）」（大分県公文書館所蔵）。
（3）前掲注（1）、『別府大学の三十年』、48頁。
（4）飯沼賢司・山本晴樹『別府大学開学ものがたり』（学校法人別府大学、令和３年12月18日）、32～33頁。
（5）前掲注（4）、『別府大学開学ものがたり』、33～34頁。
（6）松本裕司「三、戦後教育発足期における「太平学園女子専門部」の沿革」、野村新　佐藤尚子　神崎英紀『教員養成史の二重構造的特質に関する実証的研究 ― 戦前日本における地方実践例の解明 ―』（渓水社、平成13年２月25日）、136～160頁。
（7）前掲注（6）、松本著、137頁。例えば『昭和二十一年三月起　本校創立関係書綴』『昭和二十一年度　総務（庶務会計）関係書類』を挙げられる。
（8）前掲注（6）、松本著、139頁。
（9）拙稿「別府女学院設置の意義」、別府大学紀要委員会編『別府大学紀要』第64号（別府大学会、2023年２月）、79～92頁では、同じ頃に、別府女子専門学校の前身である別府女学院も、各種学校として設置されたことがわかる。
（10）前掲注（6）、松本著、143頁。
（11）前掲注（6）、松本著、154頁では「しかも、大分県内に大学昇格を準備した別府女子専門学校があり」とも述べられている。
（12）前掲注（6）、松本著、155頁。
（13）前掲注（6）、松本著、154頁。
（14）前掲注（6）、松本著、137頁では「合併の対象であった別府女子専門学校（別府大学の前身）の沿革史にも、その名は記されていない」とあり、しかも松本は佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』（学校法人佐藤学園、昭和62年９月）しか取り上げていない。

(15) 昭和21年11月21日付學校調査回答「職員組織表（11.20現在）」は大分県公文書館所蔵である。また、『太平學園女子専門部概要』の「教職員名簿」は佐藤義詮先生関係文書の中にある。吉岡義信が佐藤義詮先生関係文書を調査している。
(16) ここの引用文に見られる各下線は、筆者による。
(17) 前掲注（６）、松本著、155頁。
(18)「放談・ルボアの今昔」、「別府大学」編集部『季刊別府大学』Vol. 2 No. 2（1970.71冬季号）、５頁。
(19) 前掲注（１）、『別府大学の三十年』、３頁。
(20) 大友芳雄「別府女専時代の思い出あれこれ」、前掲注（１）、『別府大学の三十年』、167頁。
(21)「草創の頃（座談会）」、前掲注（１）、『別府大学の三十年』、181頁。
(22)「学園ものがたり＜下＞まぼろしの太平女専　別府女専の卒業証書で……」、『広報ひた』第226号、昭和53年。
(23)「日田の校舎の買収」のことでは、佐藤義詮先生関係文書の中に「校舎賣却費」を太平学園の原志免太郎が創設者佐藤から受領した証が残されている。
(24)「日田市に女専」、『大分合同新聞』昭和21年４月26日。
(25) そのうち津田剛の担当科目である「哲学及び倫理」は、佐藤義詮先生関係文書の中にある「履歴書」で確認した。
(26) 別府女子専門学校の「教官メンバー」は前掲注（１）、『別府大学の三十年』、16～17頁に、別府女子大学の「設置申請書」による「教官人員構成」は同、44～45頁に、それぞれ掲載されている。
(27)「國文科に嬉しい便り　新講師數名を迎ふ」、『別府女專新聞』第10号、昭和23年９月25日。
(28) 前掲注（14）、『学校法人佐藤学園の八十年』、21頁。
(29) 前掲注（１）、『別府大学の三十年』、47～48頁。
(30) 前掲注（21）、「草創の頃（座談会）」、189頁。
(31) 佐藤義詮先生関係文書の中に、昭和24年８月５日付の「高木市之助から佐藤義詮への手紙」が残されている。引用文に見られる●は、高木による塗りつぶしで、訂正箇所を示す。
(32) 高木市之助「序」、須藤松雄『志賀直哉の文学（近代の文学・７）』（桜楓社、昭和51年６月15日増訂新版）。
(33)「故福田良輔博士略歴」、『語文研究』第37号故福田良輔博士追悼号（九州大学国語国文学会、昭和49年２月28日）では「昭和23年４月九州大学講師に任ぜられる。昭和23年６月九州大学助教授に任ぜられ、法文学部国文学講座勤務を命ぜられる。昭和25年７月九州大学教授に任ぜられ、文学部国文学講座担任を命ぜられる」とある。
(34) 尾嶋信好「太平学園創立のころ ―津田先生と原先生―」、津田夫妻追想録刊行会『津田先生ご夫妻を偲んで』（津田夫妻追想録刊行会、平成４年10月３日）、46頁。
(35) 前掲注（34）、尾嶋著、52頁。
(36) 前掲注（４）、『別府大学開学ものがたり』、33～34頁。
(37) 大神順「太平女専と津田先生」、前掲注（34）、『津田先生ご夫妻を偲んで』、54～55頁。
(38) 大神順「幻の女子大　太平女学園のこと」、『日田文化』36（日田市教育委員会文化課、平成６年12月20日）、55～58頁。
(39)「國文科日田に分校を有す　入學試驗による轉入許可」、『別府女專新聞』第13号、昭和23年11月25日。
(40) 前掲注（34）、『津田先生ご夫妻を偲んで』。
(41) 前掲注（34）、『津田先生ご夫妻を偲んで』において、その57～58頁に大隅キクノ「津田先生ご夫妻を思う ―日田の地に咲いた太平学園―」が、同59～61頁に小川和子「追想」が、同62～64頁に加月弘子「大切な思い出」が、それぞれ掲載されている。
(42) 大隅は旧姓光安で、太平学園国文科に１期生で入学し、日田分校を卒業している。加月は旧姓赤司で、同英文科に１期生で入学し、日田分校を卒業している。
(43) 旧姓山浦は、太平学園国文科に１期生で入学し、日田分校を卒業している。旧姓河原は、同英文科に２期生で入学し、別府女子専門学校を卒業している。その他、表２や表３に見られる、長和子は後に早瀬、隅本和子は後に吉村、岡本カズ子は後に石橋、となる。
(44) 前掲注（41）、大隅著、58頁。
(45) 梶原清子「五十年の想い」、大分県立日田高女第二十八回卒業生編『宜園の華』（大分県立日田高女第二十八回卒業生、平成８年５月１日）、９頁。

(46) 前掲注（６）、松本著、154頁。
(47) 前掲注（39)、「國文科日田に分校を有す　入學試驗による轉入許可」。
(48)「文化の殿堂　別府女子大學誕生？　大學昇格申請を終る」、『別府女專新聞』第10号、昭和23年９月25日。
(49)「四年制大學か三年制大學か暗々裡に四年制への努力か」、『別府女專新聞』第４号、昭和23年１月。
(50) 前掲注（６）、松本著、157～158頁。
(51) 前掲注（27)、「國文科に嬉しい便り　新講師數名を迎ふ」や、同（39)、「國文科日田に分校を有す　入學試驗による轉入許可」。
(52) 前掲注（26)、別府女子大学の「設置申請書」。
(53) 前掲注（１）、『別府大学の三十年』、４頁。
(54) 前掲注（６）、松本著、154頁。
(55)「新制大學申請二百十九校」、『大分合同新聞』昭和23年８月25日。
(56)「新制大學審査終る　認められたもの七十九校」、『大分合同新聞』昭和24年２月11日。
(57)「“別府女子大學”實地調査にお歴々」、『夕刊新別府』昭和24年10月18日。「将来は男女共学の単大へ　佐藤校長語る」、『大分合同新聞』昭和25年３月15日。
(58) 前掲注（31)、「高木市之助から佐藤義詮への手紙」。
(59) 前掲注（49)、「四年制大學か三年制大學か暗々裡に四年制への努力か」。
(60) 別府女学院のことでは、前掲注（９）、拙稿「別府女学院設置の意義」がある。
(61) 前掲注（14)、『学校法人佐藤学園の八十年』、321頁では、別府市に「自由ヶ丘高校が第三番目の高校として誕生し」、「校長はひきつづき佐藤義詮で、高校主事として津田剛（元福大教授）が就任した」とある。
(62)「學校名変更に関する申請」「学校名変更認可について」（大分県公文書館所蔵)。